

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 中 真生

本論文は、レヴィナス哲学を主体性に定位しながら絶対的に他なるものを探求する試みと位置づけた上で、その具体的な分析の諸相と意義とを論じたものである。レヴィナスは逆説的にも、自律し能動的な認識主体ではなく、他なるものに侵され・傷つけられるような受動性を特質とする主体において示される他なるものとの関係を探求することこそが、他なるものを考察する唯一の方途であるとする。以上の他なるものとの関係は、他なるものが受動的な主体を越え出るという意味での「超過」という概念に定式化することができるが、これは、受動的な主体が身体としての主体であることによってその具体的な内実を獲得する。身体としての主体において示される他なるものの「超過」のありようの探求こそがレヴィナス哲学の核心であるとして、その探求の一貫した姿を編年的に解明し、その意義を論じた点に本論文の独自性がある。

序章において基本的な問題設定を行った後、第一部は他なるものとの関係としての「超過」の形式的な構造を解明する。デカルトの「無限の観念」に対するレヴィナス自身の解釈を検討することからこの形式的な構造を明らかにするが、同時に、デカルトとは異なり、レヴィナスの場合には、「無限の観念」を抱くコギトが受肉したものであることを強調し、レヴィナスにおける「超過」の特質を浮き彫りにすることによって、次部につなげる。

第二部は身体としての主体に定位することによって明らかにされる「超過」の具体的な内実を、レヴィナスが初期から後期に至るまで苦しみという現象に着目しながら明らかにしていることを辿りつつ解明する。特に、幸福に関する考察に重点が置かれているかに見える中期においても「イリヤ」と「エレメント」との関係を通して苦しみに関する考察が示されていること、他方、苦しみと幸福という一見すると異なった原理に力点を置きながら考察する時期による探求の違いが、自律性と依存性、自発性と受動性との間を揺れ動く不安定さを有する主体の「両義性」を示していること、以上二点を解明している点に獨創性がある。

第三部は「超過」の特質がときに悪と呼ばれることに着目し、正当化しえない・無意味な悪に関する考察を辿り、レヴィナス哲学の特質をさらに浮き彫りにする。同じく正当化しえない悪に関する考察を進めつつも身体に関する視点を欠いているナベールの思索との対比を通して、身体的苦しみを悪の考察の核心に据えるレヴィナスの思索の倫理的な特質を浮かび上がらせる。

第四部は、第二部で解明された「両義性」という主体のありようを深め、受動性が自律に先立つということを主体の被造性、時間系列における起源とは異なる「無-起源」との関係として解明し、倫理をそのような「無-起源」への遡行・再帰として位置づけて、論を閉じる。

このように、本論文は、身体という主体において示される他なるものの「超過」という視点からレヴィナス哲学を一貫した仕方で読み抜き、その意義を解明した労作である。自説の補強としての研究史の渉猟、独特な概念が頻出するレヴィナス哲学を平明な言葉で論述しようとする姿勢なども、高く評価することができる。他面、レヴィナス哲学の一貫した姿を描き出そうとする方法論を貫くあまり、異なった時期に示された思索の意義をそれぞれ個別に掬い取る姿勢に欠けている点にももの足りなさはある。とはいえ本論文は、レヴィナス哲学の提示した他なるものとの関係の諸相とその意義とを平明な言葉で十分に描き出し、今日の私たちにとりわけどのような倫理的課題があるかを示す力をもったものである。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。